# 100歳の書く記憶小説

綿矢りさ

未来科学技術で私がもっとも発展してほしいと思ってるのは、生命の研究、すなわちどれだけ人間が健康な状態のまま長生きできるかという、長寿研究の分野だ。チャットGTPやAIといったコンピューターの中の電脳たちはどんどん賢くなっているが、やっぱりそれはパソコンの世界の中での出来事で、生身の人間はどんどん歳を取っていく。人間の身体の細かなメンテナンスや、病気の早期診断や撲滅といった医療ジャンルの科学技術が早めに発展してくれることを現在四十歳近い私は願んでやまないわけだが、そんな風にもし世界で平均寿命がじわじわ伸びていって、90歳とか100歳とか120歳があんまり珍しくない世の中になっていったら、生み出される文学もきっと変わっていく。

現在の日本でも高齢の人が書いた文学作品は数多くある。しかし、じゃあ国民全員が題名を知ってるぐらいの、またはめちゃくちゃ売れたベストセラーとして記憶に新しい、作者が執筆時90歳以上の作品があるかと言えば、二冊以外あんまり思いつかない。もしあったら、ごめんなさい。思い付いた二冊というのは98歳だったときに書かれたという詩人の柴田トヨさんの「くじけないで 」という詩集と、作家佐藤愛子さんの「九十歳。何がめでたい」だ。「くじけないで」はみずみずしい感性で綴られた詩集、「九十歳。何がめでたい」は加齢のボヤきを誇り高い文章で綴った爆笑のエッセイ集で、どちらもどの年齢の人が読んでも面白いが、特に筆者と同じ年代の人たちが読んで、勇気づけられた、元気を取り戻したなどと感想を持つことが多かった。これらの本には高齢者でもちゃんと読める工夫があり、字は大きく、内容は長すぎない。そして前向きな筆致。逆に考えると細かい文字や細かい設定の本は、百歳の足音が近づいてきた人たちにとっては、不親切といえるのかもしれない。

でも科学技術が発展した未来の百歳は、もしかしたら目にはレンズを入れて見え放題、病気は早く治せて身体はピンピン、頭も薬のおかげでボケが撲滅し、いつまでも働けるので仕事の辞め時が分からず未だ現役、なんてこともあるかもしれない。日本では現役退職する年齢の基準が今でもどんどん上がっている。だから未来的には百歳の人が未だ電車で会社通勤しながら(未来になっても電車通勤は無くなってないのかと思うとなんだか悲しいが)電子書籍で本を読んでる未来が待っててもおかしくない。そしてそれは

自分かもしれない。

そうなったとき、超高齢に差し掛かった未来の作家たちは、頑張らなきゃいけない。文字が小さすぎて読めない、肩が凝る、登場人物の名前が覚えきれないなどという理由で、読書をリタイアしがちな年齢層が、まだ本を読んでくれることになるから。身体に不調が出てきたご長寿の方の娯楽と言えば、私の周りではテレビが多い。耳が遠くなってもイヤホンを耳につけて大音量で聞き、寝転がってテレビ画面を目で追うだけでいいから、身体が楽なのだろう。座って本を読む、内容を理解しながら想像力を駆使して物語を追う作業は、ボーッとしながらテレビを見るより、だいぶ疲れる作業なのだ。でもそれを全部クリアできるほど元気な百歳の人間が多数存在するとするなら、必要とされる本ってどんなだろう。と考えると、思い出話と元気の出る話だと思った。人間の年齢の重みは、記憶に出ると思う。すごーく昔の、江戸時代の最後の将軍を子どものころ見た、みたいな思出話を、おばあさんがテレビでしてるのを聞いたことがあるけど、へえーっと、そのエピソードだけで驚き尊敬する気持ちになった。自分は教科書や歴史の本でしか知らないような出来事をリアルタイムで見たうえ、さらにそのおばあさんは新幹線が初めて開通した日も、世の中の人のほとんどが携帯電話を持ち始めた時代も経験してる。まさに生き字引というか、ガルシアマルケスの「百年の孤独」を思い出すというか、たくさんの困難を自分の生命の灯火を頼りにして乗り越えて、その間に様々な歴史や人類の発展を見てきたんだなぁと、感慨深い気持ちになる。何か興味のある歴史的なできごとを検索したら、ぱっとその内容を教えてくれるネットの百科事典はとても便利だけど、やっぱり個々の人間の生身の体験に比べると、独特さが無いというか、共通意識の中でだけ成り立ってる無個性な情報という気がせんでもない。人間の記憶と共通認識、どちらの方が正確とは言えないにしても、人間の記憶の中に存在する過去というのはかけがえのない価値があると思うし、死んでなくなる前に遺す意義もあると思う。

だからもし、自分が百歳近くになっても本を書く仕事をしていて、同年代の人も小説を読んでる時代が来たら、私は自分の記憶力を頼りにして昔から現在までの物語を書きたい。できれば歴史の重大事件というより、日常のささやかな変化を書きたい。テレビがブラウン管で分厚かったときのこと、マイケル・ジャクソンが元気に歌っていたころ、それらはまだ記憶に新しいが、段々と化石化して伝説のようになっていくのかもしれないから、そういうのを当時の感想と共にずっと憶えていたい。百年というのは、多分人間にとって大きな区切りだ。百年史を興味深く面白くざっくり描ける百歳代の作家が地球上にたくさん存在するようになったら、何か文学というもののスケールの大きさも変わってくる気がする。各国の百年小説を読んでみたいし、自分も書きたい。

もう一つ発達してほしいと思う科学技術は、翻訳の技術だ。外国語を翻訳家が翻訳してくれた本を読む分には、内容も表現も工夫が凝らしてあって、スムーズに楽しく感動したりして読めるが、ネッ

ト小説の文章を翻訳アプリに放り込んで訳してもらっても、話の意味すら掴めない出来の文章になることが多い。無料で瞬時に訳してもらって文句を言うのはどうかと思うし、物語のような長文で無ければ、例えば遊びに行った外国で口語の短文を翻訳するぐらいなら、正しく訳してくれたりもするから、あまり悪口は言いたくない。世話になっている。ただもうちょっと精度を上げてくれれば、言うこと無いんだけどなぁと思う。テレビや映画などの映像作品は最悪登場人物たちが何言ってるか分からなくても、画を見ていれば大体の物語の粗筋が分かる。でも本はそうはいかない。図や写真が頻繁に入った本で無い限り、文字だらけのページは読めないとお手上げだ。

自動翻訳の発展の未来に関してもう一つ夢を語れば、外国語が一語一語正確な訳というよりはニュアンスで、脳に直に言葉が送り込まれるような装置で読んでみたい。超訳と音読を兼ね備えたようなアプリができたら最強だと思う。そうなったら、色んな国の、わざわざ翻訳本が出ないような、ちょっとくだらない、泡沫の内容の本を読んでみたい。例えばペルーの都市伝説とか、中国で今流行ってるおやつとか、スペインの女優が書いた暴露本とか、実在するか分からないけどきっとありそうな、そんな類の文章を気軽に読んでみたい。

そして自分の書いた小説も気軽に訳してもらえて、意外な国の人に届いてくれたら嬉しい。へえー日本の小説家はこんなこと考えてるんだと、ざっくりでも外国の人に気軽に知ってもらえたら、地球をより狭く感じるような気もする。しかしこなれた翻訳文体を科学技術で作るのって、とっても難しそうだ。中国語を習っているのもあり、中国語の歌詞を日本語に訳したりしてみたこともあるのだが、一番初めは辞書から単語の意味をそのまま取ったような堅苦しい訳になり、そのあと何度も見直していくなかで、こなれた日本語になってゆく。そして調子に乗って改変しすぎると、元の中国語の意味から離れてしまって、またやり直しということにもなる。あとその歌詞の中国語に別の意味が込められてたとしても、中国で生まれて暮らしていた訳ではないので、そのニュアンスを知らずに訳してしまってる場合もある。言葉には歴史と背景があり、その言葉を母国語として頻繁に使っている人間にしかどうしても100パーセント理解しづらいフレーズが、たくさんある。AIにありとあらゆる日常会話を学習させ、本やテレビで使われてる文章も網羅させれば、こなれた翻訳も可能になるんだろうか。その辺、どれくらいまで可能か私には想像もつかない。

ただ翻訳にも時代性はにじみ出てて、例えば80年代やそれより前の洋楽の歌詞の日本語訳など見ると、かなり懐かしい感じのする語彙に出くわしたりする。元々の英語の歌詞はオリジナルだから不変としても、訳し方によっては80年代仕様にも令和仕様にもその歌詞を変えられるわけだから、それは翻訳の面白いところでもある。自動翻訳は一体どんな文体を身につけて発展していくのだろう。ひたすら正確な翻訳を目指すのか。それとも流行の言葉遣いなどをふんだんに取り入れて、どんどん現代人の人気を獲得す

る翻訳を目指すのか。一つ想像できるのは、翻訳でも小説を書くのでも、人間と未来科学技術は共通のゴールを目指さないだろうということだ。人間の想像力には人間の良さがある、科学の技術には科学の良さがあるなかで、科学の方が人間を必死に真似る、あるいは人間の方が科学を必死に真似る、ライバル関係になるなんてことは、起こりそうで起こらない気がする。自分より性能が良く、よく働く働き手が出現するとして科学技術を脅威に感じ、人間の仕事のシェアが奪われるのではないかという問題提起のニュース記事を見かけることもあるが、そんなにシェアを取り合う事態になるかな？と私は個人的に思っている。人間の作家がAI作家に仕事を奪われ、人間の翻訳家がAI翻訳家に仕事を奪われる。そんなこと起こる？本当に？と思うし、ずいぶん夢のある未来予想図だなと思う。どれだけ未来になってもシビアに、今と同じく、人間のライバルは人間のままの気がしている。未来科学技術の脅威より、たった今産声を上げた実は文才の宿っている赤ちゃんや、たった今筆を取り文章を書き始めた未来の小説家の方が、同じ職業のシェアを取り合う場面では、よっぽど生々しいライバルのように感じる。

（作者紹介：作家、第130回芥川賞受賞）